

五所川原第一高等学校

「貧困のためにできること」チーム

低賃金問題の解決～賃金と私達～

地域の視点からSDGs達成に貢献するために貧困のない豊かな青森県について考察を行いました。都市圏と最低賃金を比較したとき、圧倒的に低い青森県。その原因として考えられるのが多くの非正規労働者を雇用していることにありと考えました。私たちはどうすれば非正規労働者の数を減らせるのか検討することにし、労働条件の改善に向け提案を行いました。



青森県立六戸高等学校

さつきぬまビオトーププロジェクト

35年間手入れがなされていなかった高校に隣接する館野公園とその中のさつき沼は現在、環境面で多くの課題を抱えています。昨年1年間の調査結果をもとにどのような取り組みや設備が必要なのかを話し合い、六戸町などとタイアップし①さつき沼とその周辺の生物多様性の増進②館野公園を環境教育の場にする③地域の活性化を目的にビオトープ作りを始めました。



盛岡市立高等学校

自然科学部

岩泉町龍泉洞地底湖及びその周辺における環境調査

龍泉洞は史跡名勝天然記念物として指定され、地底湖の水は名水百選に選定されています。地底湖には照明が設置されています。その影響から藻類が繁殖しています。そこで私たちは7年前から、龍泉洞地底湖に繁殖した藻類の観測及び測定を行ってきました。水質の悪化の原因となる藻類を観察、採取、種類を同定し、除去対策を立てることで、洞内の美化や環境保全に貢献することができると考え活動しています。



岩手県立花巻農業高等学校

食農科学科3年ソーセージ研究班

岩手県産羊で地域を活性化～肉の臭みを抑えたソーセージの開発と普及～

近年、奥州市や一関市を中心に耕作放棄地の有効利用を目的に羊を飼育している農家が増えていくことを知りました。羊肉は高級肉としてのラム肉又、ジンギスカン用にマトンとしての利用が一般的ですが、用途が限られあまり利用されていません。そこで私たちは、加工用途を広げるため、もっと身近でおいしいソーセージを作り「羊肉を広めていきたい」と思い研究を始めました。



岩手県立遠野緑峰高等学校

生産技術科2年 野菜・果樹研究班

エゴマで笑顔プロジェクト

遠野市では4年前から農業委員会を中心にエゴマ栽培に取り組んでいることを知りました。しかしエゴマの収穫量が少なく、エゴマ油として販売しても価格が高いという課題があります。そこで、私たちは、加工用途を広げるため、(1)エゴマの特性や栽培方法を習得し、栽培技術を向上させる。(2)エゴマに付加価値を付け、新商品開発と商品化を目指す。(3)地域の活性化を図る。といった研究を行いました。



岩手県立遠野緑峰高等学校

草花研究班

緑峰産ホップ新品種開発計画 ～高齢化が進むホップ農家を救え!!!～

遠野市特産「ホップ」の残渣を和紙の原料として資源化しその用途と可能性を拡大させてきました。しかしホップ農家の高齢化による担い手不足が深刻で、ホップ生産量もピーク時の4分の1まで減少している現状を知りました。日本一の生産量を誇る岩手・遠野の宝「ホップ」の生産が衰退してしまうのではと、危機感を持ち持続可能なホップ生産の基礎研究をスタートさせました。



秋田県立能代高等学校

チームギバサ

ギバサ(アカモク)の塩害防止剤の研究(塩害対策)

世界的に耕作地における塩害が問題になってきている。昨年度の先行研究を参考にしてギバサの粘り成分によって塩害が防止できるのではないかと考え研究を始めた。結果、サンプル測定において上層部には食塩水がほとんど上昇せずギバサ粘り成分のストッパー的役割が確認できた。実用面ではまだ研究の余地があるが、塩害防止対策は食糧問題にも関係するためこれからも研究に取り組みたい。



秋田県立増田高等学校

農業科学科3年 チーム作物

「SDGs」達成に向けたカーボン・オフセットの取組

私たちは秋田県版GAP基準に則り県内初の実習農場として最大限環境負荷に配慮した水稲栽培を行っています。地球温暖化について排出量を調べたところ栽培管理下で多くの二酸化炭素を排出していることがわかりました。そこで横手で取り組まれているカーボンオフセット「横手Jクレジット」について着目し本校農業科学科の農産加工品で市民と森林整備を結びつける取り組みを行いました。



宮城学院高等学校

自然科学班

食用廃油の資源化

パンやお酒をつくるのに用いられるコウボ。フライや天ぷらに用いられた後の廃棄物になる食用廃油を食べることができるコウボを見つけ出し、コウボにタンパク質をつくらせ食糧や飼料にすることをめざす研究をおこなっています。私たちは、国際機関が問題視しているタンパク質危機の解決策を目指しています。これは、食用廃油による水質汚染などの環境問題と食料問題の同時解決ができるものです。



宮城県農業高等学校

科学部チームsmiles

サクラの新品種開発で桜の緑被率を上げる ～被災農業高校が立ち向かう震災10年目の挑戦!～

東日本大震災からの復興のため津波跡の校庭に残った桜を用い、増殖と植栽を繰り返し、間もなく千本となります。桜と地域住民を繋ぐことで緑被率が上がり、街路樹や沿岸部の緑化、森林の一部として貢献できると考えました。現在は、昨年の台風19号の被災地などで、オンリーワンの桜、奇跡の桜、新しい植栽法を紹介しながら、桜でなければならないCO₂吸収促進を提言しています。

